

象徴天皇制における行幸

——昭和天皇「戦後巡幸」論

瀬畑 源

はじめに

全国紙の社会面の隅の方にたびたび現れる天皇皇后の行幸啓記事<sup>①</sup>。その多くは、訪問先とそこでの発言が一言紹介される程度で、ほとんど注目されることがない。

しかし、天皇皇后の行幸啓の回数是非常に多い。宮内庁のウェブサイトに掲載されている「お出まし」の件数を計算すると、即位した一九八九年から二〇一二年までに天皇が行った行幸の数は、都内一〇一七件（年平均四二・四件）、都外三二二件（年平均一三・〇件）にのぼる<sup>②</sup>。明仁天皇は即位から一五年で四七都道府県すべてを訪問し、自然災害の被災地への訪問も積極的に行っており、昭和天皇の時代よりも行幸の件数が増えていることは間違いない<sup>③</sup>。

ただし、こういった積極的な行幸は、明仁天皇が即位してから始まったわけではない。「天皇三大行幸」（各都道府県が持ち回りで毎年開催している行事への行幸）といわれる国民体育大会、全国植樹祭、全国豊かな海づくり大会のうち、前者二つは昭和天皇が始めたものであり、他にも定例化している日本学士院や日本芸術院の授賞式への行

幸なども同様である。行幸は憲法上の国事行為ではなく、政府見解では「象徴としての地位に基づく公的行為」と見なされているが、昭和天皇、明仁天皇の行動から見ても、行幸は日本国憲法下の天皇の重要な活動と見なされてきたと言えるだろう。

では、なぜ行幸は重要視されてきたのだろうか。このことを考える際には、日本国憲法施行前後の天皇行幸のあり方がどのようなものであったのかを分析する必要がある。敗戦前の天皇行幸は国家的な行事であり、訪問先では奉迎のための大量動員が行われ、厳しい警備体制が引かれた。しかし、敗戦後の連合国軍主導の改革の中で、天皇は権力を剥奪され、日本国憲法によって「象徴」という地位に変わった。これに対応して、行幸の政治的な位置づけや実施方法も変化をしていった。この変化を調べることで、現在の行幸のあり方の原点がどのようなものであったのかを浮き彫りにできるだろう。

そこで本章では、一九四六年二月の神奈川県から五四年八月の北海道まで、米軍占領下の沖縄県を除く全都道府県へ行われた昭和天皇の全国巡幸（「戦後巡幸」<sup>④</sup>）に着目して、日本国憲法下における天皇行幸の位置づけについて考察をしていきたい。

近代日本における行幸啓の代表的な研究としては原武史のものが挙げられる。原は明治期から敗戦前の天皇・皇太子の行幸啓を詳細に分析することによって、「近代日本では……天皇や皇太子による行幸啓を全国レベルで繰り返し、支配の主体を訪問した地方の人々、狭義の政治から疎外されていた女性や外国人、学生生徒を含む人々に視覚的に意識させることを通して、彼らを「臣民」として認識させる戦略がほぼ一貫してとられていた」とし、その支配は「個別の天皇や皇太子の身体を媒介とする、視覚的で具体的なもの」（「視覚的支配」）であったと述べた。<sup>⑤</sup>原は敗戦後の戦後巡幸においても、戦前にあったような視覚的支配に伴う確固とした秩序や規制は見られないものの、「一方に支配する主体、他方に支配される客体という区別が緩和された形での、昭和初期の親閲式や奉迎会で見られた天皇と臣民の一体化の光景が再現したと解釈することもできよう」とし、視覚的支配が残存していることを示

【表2-1】昭和天皇戦後巡幸一覧

	年	月日	略称	都道府県
初期	1946年	2月19、20日	神奈川	神奈川
		2月28日、3月1日	東京	東京
		3月25日	埼玉	埼玉
		3月28日	群馬	群馬
		6月6、7日	千葉	千葉
		6月17、18日	静岡	静岡
		10月21-26日	愛知・岐阜	愛知・岐阜
		11月18、19日	茨城	茨城
中期	1947年	6月5-14日	関西①	京都・大阪・兵庫・和歌山
		8月5-19日	東北	福島・宮城・岩手・青森・秋田・山形
		9月4-6、8日	栃木	栃木
		10月7-15日	甲信越	新潟・長野・山梨
		10月23日-11月2日	北陸	福井・石川・富山・岐阜(高山)
		11月27日-12月11日	中国	鳥取・島根・山口・広島・岡山
後期	1949年	5月19日-6月10日	九州	福岡・佐賀・長崎・熊本・鹿児島・宮崎・大分
	1950年	3月13-31日	四国	香川・愛媛・高知・徳島・兵庫(淡路島)
	1951年	11月12-25日	関西②	京都・滋賀・奈良・三重
	1954年	8月6-23日	北海道	北海道

唆している。<sup>(6)</sup>

ただ、原は敗戦後の行幸についてはとくに実証したわけではなく、この示唆は再検討される必要があるだろう。思想・言論の自由が保証されるようになり、マスメディアにおける天皇の語り方も変化している以上、行幸の政治的な意味はたとえ連続しているように見えたとしても、何らかの再編が行われているはずである。天皇や宮内省、政府、行幸を報じたマスメディア、受け入れる側の地方自治体、天皇を迎えた民衆、様々なアクターの様々な思惑と受容のあり方がなされていることに注意するべきである。<sup>(7)</sup>

そこで、昭和天皇の戦後巡幸がなぜ行われたのかを述べた上で、訪問先のデータから巡幸の意図を分析し、さらに宮内庁の資料を中心として戦後巡幸を分析することで、日本国憲法下の象徴天皇制における行幸の意味について考えていきたい。